

共生の森とSさん

園長 児嶋 草次郎

A氏：やあ、また電話をしてしまいました。先週、古い友人の葬儀があり、見送るために、帰省しました。あなたの姿を見かけなかったので、前日の通夜に出られたんだろうと思いました。翌日、友愛社の方にも寄ってみたけど、出張中みたいで会えませんでした。あれから何日かたちますが、電話を試してみました。ある人から亡くなったSさんと、あなたとが親しかったと聞いたものだから、ぜひその関係を聞いてみたかったし、友愛社内での秋の花々も美しく、特にカンナの世話等聞いてみたくなりました。私は、色んな所をけっこう訪ねるけど、これほど色んな色のカンナが咲き乱れている姿は、あまり見ません。話をもどしますけど、Sさんとあなたとが近しかったとは意外でした。

私：Sさんについては、突然に召されてしまい残念です。必ず1か月に1回くらいは来訪され、友愛社事務所の応接室で2時間くらい話していられました。ところがこの1か月半くらい姿を現わされないのです。心配になって家に2.3度電話を試してみたりしていたところでした。話す機会は以前にもありましたが、Sさんが定期的に月1回訪れるようになったのは、もう20年以上前からだったように記憶しています。最初の頃は、友愛通信を発送した後頃に来訪され、その読後感を述べられたりしていたのですが、話題はどんどん広がり深まり最近ではウクライナ戦争のことやそれをめぐる歴史的・地政学的な話にまでSさんの話は発展しました。読書家でもあり、私自身学ぶことも多かったのです。

A氏：彼とは高校時代の同級生ですが、私は都会に出たけど、彼は農家の長男であったので、成績は優秀だったんだけど、学問を続けることは断念したのです。彼は私に対してはあまり関心はなかったようだったけど、私は彼が個性的人間であり、ずっと気になり、たまに連絡を取り合ったりしていました。石井十次につながる人であったとは、今回初めて知りました。高校時代、一切、彼の口から石井十次の話は出て来なかった。

私：Sさんのおじいさんは敬虔（けいけん）なクリスチャンで、岡山孤児院の初めの頃から職員として働かれました。主に寄付募集で全国を回らされたようです。各地の教会やクリスチャンを訪れながら、募金するわけでしょうが、よほどの信念と自律力がなければ続かないでしょう。現金を持って歩くことにもなりますので、誘惑とも常に対峙しなければなりません。

石井十次からの信頼もかなり厚かったと思います。最後は、この茶臼原に岡山孤児卒院生たちと同じように、農家として独立されたのです。私に言わせれば、この理想郷となるべき地を守ってくださったのです。

A氏：あなたが友愛通信にも書いておられましたが、石井十次が亡くなる時、卒院生、職員、子供たちを集めて、「一人ひとりが十次になって志を引きついでほしい」と言ったという話につながるのかな。

私：Sさんのおじいさんの志の中にもそれは少しはあったと信じたいですね。ところが、石井十次の亡き後、現実には厳しいものでした。農業はいつの時代も大変ですが、自分の家族が食べていくだけでも必死に働かなければならず、とても他人のことまで考える余裕はなかったと思います。それに当時、偏見もありました。Sさんの時代になっても、小学生当時、町の小学校に登校して行くと、「コジイ

ン、コジイン」といじめられたという話は、Sさん自身からも聞いたことがあります。

A氏：そういうこともあって、高校時代、自分のこと、家族のことを語ろうとしなかったのかもしれないね。その問題はSさんだけの問題ではなく、卒院生、そしてその家族共通の問題だったのだろうね。

私：差別の話は、この地区の複数の人たちから聞いたことがあります。いつの時代も理想と現実との乖離（かいり）の問題はあります。そういう時代状況の中で、石井記念友愛社は、昭和20年に施設として再興されたわけです。

A氏：敗戦後すぐで、戦災孤児を救うときれいごとを言っても、何もモノのない時代だから大変だったろうね。あなたのお父さん児嶋虜一郎さんの決断には頭がさがるね。自分と家族が生きることが困難な社会状況の時だからね。

私：昭和21年に農地改革も実施されるようになり、それまで小作として周辺に独立した卒院生たちも完全に自立することになります。その経過で岡山孤児院の土地を引き継いだ父と地域の方々の間に軋轢（あつれき）の生じた部分もあったようです。お互いにとって、決して平和な再スタートではなかったと思っています。

A氏：そうだろうね。互いに全く余裕はない。自分たちの家族を守ることで精一杯。あなたのお父さんも、岡山で育ったということだから、言わばよそ者だよ。そこから新たな理想郷作りが始まるのだけれど、その過程については、あなた自身が体感して来られている。

私：そこへの事については、今まで友愛通信にも書いて来ました。最近、自分なりになんとかその戦後の歴史をまとめることができきていますので簡単に振り返ってみます。

父は石井十次の孫とは言っても、岡山孤児院とは何の関りもなかったのだから、まず「石井十次日誌」を読み、それを活字化する（出版）ことで、石井十次の理念や岡山孤児院の文化に迫ろうとした。そのうち様々な資料を整理・保存する石井十次資料館も建てる。

そのことが次の動きを呼び込みます。石井十次研究者が集まるようになったのです。私は戦後の石井記念友愛社の歴史を岡山孤児院文化の発掘作業だと言って来ました。研究者たちは文字で発掘・検証してくださいました。しかし、それだけでは不十分です。文化は人から人に伝承されて行くものだからです。

岡山孤児院が一度解散されて再開されるまで、20年間のブランクがあります。畑を20年放置すれば完全に山にもどりますが、文化を再興するというのは安易なことではありません。

最近私は、岡山孤児院は解散したけれども、その文化は、この地域の中に生き続けたと解釈しています。この地域のお年寄の中には、石井十次から名前をつけてもらったとか、小舎制の園舎ですばらしい保母さんに指導を受けたとかいう方もおられました。そういう生き証人たちと交流するうちに、文化は蘇っていったのです。研究者たちも、一つ一つ検証していきました。もうほとんどそういう方々は、亡くなられてしまいました。

私にとっては、その証言者の一人がSさんであったのです。直接岡山孤児院につながっていたわけではないけど、この地で生まれ生きて来た末裔としての話から、学ぶべきことは多くありました。私なりに岡山孤児院関係者の築きあげた文化をイメージすることができました。そして、石井十次が亡くなる時に言い残した、「一人ひとりが十次になって志を引きついでほしい」という言葉は、言葉としては消えたとしても、その感性はそれぞれの卒院生、そしてその末裔の方々の心の中に生き続けていると確信するようになったのです。子供の教育をすごく大事にされていること、また、道徳心も高いこと等他とは違った人格を持っておられたように感じます。Sさんも長男だから農家を引き継いだけれど、教養は高く、私自身色々学ばせていただきました。今の時代であれば、学校の先生か公務員か

学者さんになられた人でしょう。

お付き合いが始まって、私はできるだけ、同じ石井十次の遺言を引き継ぐものとして、プライドと誇りを持つようにお導きさせていただいたつもりです。そのうちSさんのDNAが目覚めたのか、心を開いて色んな思いを話してくださるようになり、はっきり言って、私の心の友となりました。突然に亡くなられて、取り残された感じで私もショックです。長々と話してすみません。

A氏：ふーむ。高校時代の彼の葛藤が見えるような気がするし、石井記念友愛社にとっても大事な人だったということが納得できました。

私：葬式の後、県外に暮らす息子さんと娘さんお二人が挨拶に来てくださいました。色々話しているうちに、息子さんは、すぐに石井記念友愛社後援会「石井十次の会」に入会していただきました。お父さんの志はしっかり息子さんに引き継がれるだろうと安心してお別れすることができました。

A氏：ところで話題を変えたいんだけど、彼の天国への旅立ちをカンナや色とりどりの秋の花が見送っているかのように見えて不思議に思いました。

花の栽培のことでお聞きしたいと思いました。街の公園のように人間によって管理されている花というより、自然と共生し合っている花園というように感じたので。何か方針を持ってやっておられるのかなと思って。

私：その前にAさんにお伝えしておきたいことがあります。Sさんにいただいた植木が2種類、園内で元気にその生息域を少しずつ広げているということ。今度来られた時には、確認してみてください。

一つは富士桜です。苗木をもらい静養館前の石井十次胸像の両脇に植えました。小ぶりの花が早春に咲きます。不思議な桜で伸びた根から新たな芽を出したり、あるいは枝の付け根あたりから根っこを出したり、生命力旺盛な桜なのです。この1.2年挿し木に挑戦していますが今のところ成功していません。豆桜の一種のようです。

もう一つは、Sさんの屋敷の中に生えていた緋桐（ひぎり）という低木です。何本か7.8年前にいただいて、これは、園内何か所か、草花のバックになるように少々陰になるような庭木の間等に植えています。溜息が出るくらい暑い夏の間、サルビアのおぼけのような真っ赤な花を咲かせてくれます。これも、地下茎で周辺に徐々に成育域を広げていきます。唐桐ともいうようです。これから桜や緋桐の咲く時期になると、Sさんを思い出すことでしょう。カンナについても、この地区に住んでおられたイサブローさんから赤いカンナを分けてもらったり、現在も交流のあるエバラさんから分けてもらったりしています。

さて、Aさんがおっしゃってくださった自然と共生し合う花園についてです。確かにこの園の花々は、この大自然と共生し合っていると思います。50年くらい花作りをして来て、ここで栽培する花の種類も限定されて来ています。若い時は色々花の種をまいてみましたが、この自然に合うものしか作らなくなりました。最初の頃は、ブロックや石で囲んで、その中にだけ花の苗を植えていました。一所懸命管理・手入れしようと思いました。都会の発想と一緒です。都会の花壇で、まだ花は美しく充分に咲いているのに、管理する側の都合で強引に引き抜かれ、新たにハウス等で育てられた花苗をその後定植する姿をみるがありますが、悲しくなります。そういう花壇は手入れを怠ると、たちまち雑草園になっています。町の常に美しく整備された花壇は、相当のお金がかかっていると思っただけです。

私は齢を取るに従って、できるだけお金のかからない、また手入れの少なくてすむ栽培法というもの考えるようになりました。花の種は原則として買いません。秋のサルビア、マリーゴールド、春のキンセンカ、フーセンナデシコ、クリサンセサム等は、種を採取して次の年に播きます。ケイトウ、

メランポジウム、トレニア等は、何もしなくてもこぼれ種から勝手に芽を出し、生育域を広げていきます。そういう自立的な花は、必要な場所にどんどん移植してあげればよい。

カンナは栽培を始めてもう40年以上になります。この友愛社にもともとあったカンナは黄色だけでした。イサブローさんから赤色のきれいなカンナの株をいくつか譲り受けたのがきっかけで、どんどん増やしていきました。色で言うと、クリーム、黄、ダイダイ（2種類）、ピンク（3種類）、赤（3種類）等、色も様々です。カンナの花の良い所は、5月頃から12月霜が下りるまで、次々に株を増やしながらか咲き続けてくれるところです。もちろん回りの雑草を時々刈り取ったり、1年に1回は追肥をしたりの手入れは必要ですが、花壇じゃない雑草の茂る路地でもよく育ちます。

下の道路添いにも園芸部の子供たちや職員と一緒に植え広げて、500mくらいのカンナロードができていましたが、この1.2年、随分枯れてしまいました。里芋の病気が入ったようです。色んな車が走るので、コロナと一緒に感染したのでしょうか。私も高齢化して、体力の限界を感じるようになったので、今は園内に集中するようにしています。

A氏：なるほど、ここまでになるのにそれなりの歴史と工夫と言うか努力があったんですね。こんなに色とりどりのカンナが咲いている所って、日本どこにもないと思いますよ。宮崎空港を下りても、宮崎市内の大通りを通っても、咲いているのは赤だけだものね。あなたの園のカンナは、自由奔放に共生し合っているように見える。特にピンクがよい。

私：共生で思い出したのですが、以前「植物は<知性>をもっている」（ステファノ・マンクーズ アレッサンドラ・ヴィオラ）という本を読んだことがあります。つい先日（10月8日）には、NHKテレビ（BS1「植物からのメッセージ—地球を彩る驚異の世界—」）でも、感動しながら学びました。植物たちは、人間とは全く違った方法で互いに情報を交換し合ったり、地中で共生し合ったりしているのだそうです。根にまとわりつく菌糸がネットワークを形成し合っていて、森の中の大木の下で育つ幼木は、菌糸を通して大木が光合成で得た養分の一部をもらっているとか。今まで想像さえしなかった共生の世界です。

A氏：それは初めて聞く話だ。すばらしい。森の木々、植物たちは、土の中で共生し合っているわけだ。そう言えば石井記念友愛社で今年度建設している「友愛の森」には、森の植物たちから学ぼうという気持ちもあるのだろうね。

私：石井記念明倫保育園の裏（北側）には、火産宮神社（ほむすび）があります。この保育園はもともと町立南町保育園だったものを、民間移譲によって石井記念友愛社で経営させていただくようになったのです。名前も今の名前に変え、この度老朽化で建てかえることになったのです。この保育園の敷地は、この神社の鎮守（ちんじゅ）の森ではなかったのか。その由来については今後調査が必要ですが、その森を再生させたいというのが一つ。それから子供、障がい者を中心とした人の共生の森を作る核にしたいというのが一つ、そして、御指摘のほんとうの森の共生から学ぶというのも加えられるでしょう。

私たち社会福祉法人は、土中の根の先の菌糸みたいなものかもしれません。Sさんは私と岡山孤児院の歴史、そして地域をつないでくださった菌糸みたいな存在だった、今、そう感じます。御冥福をお祈り致します。

A氏：私も同感です。ありがとうございました。